

中京大学卒業式祝辞

学校法人梅村学園 理事長

小川英次

本日ここに二〇一二年度中京大学卒業式を行うことができますことは、卒業生はもちろん、教職員にとりましても、大きな喜びであります。また、本日は卒業生のご家族も多数ご出席いただいています。ご子弟のご卒業をさぞかし待ちわびておられたことと存じます。梅村学園を代表して心よりお祝いを申し上げます。

学部卒業生の皆さん、修士・博士の学位を取得された皆さん、本日は誠にめでとうございます。明日からは中京大学のそれぞれの学位を持つ者として、誇りと夢と勇気をもって、次なる活動の舞台へ進み出てください。そのことを心から願っています。

さて、この会場の多くの皆さんが学んだ四年間を振り返りますと、「停滞」「閉塞」「混沌」といった言葉が幾重にも連なる時代であったと思います。

リーマンショックの世界的不況によって、二〇一〇年はアメリカを代表する自動車メーカー二社の経営破綻で始まり、世界的金融機関の合併・統合が相次ぎました。財政・金融危機はヨーロッパに広がり、新興国の経済を減速させ、日本経済にも大きな影響を及ぼしました。

二〇一〇年度の大学新卒者の就職率は、氷河期といわれた一九九九年と並ぶ過去最低を記録し、製造業は円高や経済連携の遅れといった猛烈な逆風で経営体力を消耗しました。お家芸だったヒット商品を生み出す力もそがれ、隣国などにお株を奪われました。

社会に目を転ずれば、急速な少子高齢化で、年金、医療、介護など、社会保障制度の維持に黄色の信号が灯りました。パート、契約社員などの人たちは千八百万人を超え、働く人の三五%に達しました。その増大が少子化を加速させる悪循環を招いています。

政治は迷走を続け、国のリーダーが四年間で四人も交代しました。なにより東日本大震災の被災地では二年たった今も三十二万人が避難を余儀なくされ、被災者の生活はいまだ再建からほど遠いところにあります。

国全体が沈みがちになった、この四年間ですが、希望や勇気をもらう感動的な出来事がありました。一つは、小惑星探査機「はやぶさ」の奇跡的な帰還です。三億^{キロ}かなたの、幅五百^{キロ}の小惑星に着陸して砂を採取し、宇宙を五十数億^{キロ}さまよい、打ち上げから七年の後に地球に戻ってきたことです。

二つ目はI P S細胞を開発して昨年のノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授です。「まだ一人の患者も救っていません」。受賞が決まったあとの、謙虚で誠実な姿勢が感銘を呼びました。

もう一つは昨年夏のロンドン・オリンピックです。獲得したメダルの数以上にアスリートたちの言葉が感動と共感を与えました。「被災者の皆さんと心を一つにしてメダルを取ることができました」。男子ハンマー投げで銅メダルを獲得した本学スポーツ科学部准教授、室伏広治選手の感想は、復興に向けて一歩ずつ進む東日本大震災の被災地と、国民の思いを合わせ繋ぐ象徴的な言葉でした。

いま、我が国は、再生の道へ歩みだせるかどうかの岐路に立たされています。だからといって、憂いていたところで光明が見つかるわけではありません。「はやぶさ」を帰還させたスタッフのように「悲嘆にぐれない」強い精神と、ノーベル賞の山中教授やオリンピックの室伏選手の言葉に象徴される、「細やかな気配り」と「誠実・丁寧に成し遂げる」姿勢、いわば日本人の底力が、その手がかりであるように思います。

卒業式という特別の機会ですので、皆さんに三つのことをお伝えしたいと思います。

一つは、職業人としての自覚、職業人としての倫理です。それぞれの職業・仕事は社会の中で自立の基礎であるとともに、社会に参加し、その一員としての役割を引き受けることでもあります。仕事の領域を問わず、社会のルールを守り、礼儀正しさや気配りを大事にしてください。きちんとした佇まいや気遣いは信頼につながります。信頼は社会生活の礎です。一人ひとりのそのようなあり方が、社会の信頼性を構築し、皆さん自身の人生を豊かにすることになるでしょう。

二つ目は、学ぶ心、学ぶ姿勢を失わないでいただきたいということです。人間の欲求には限界がないのと同じように、自分を高めたいという「自己実現」の欲求もまた無限です。しかし、だれもがそこに達するわけではありません。それは、途中で、学ぶ心、学ぶ姿勢を失ってしまうからだと思います。

生涯を通じて学ぶ姿勢を持ち続けることは容易ではありません。経験を積み、自信をつけると、学ぶべきことがなくなつたが如く、錯覚してしまうこともあります。しかし、より高い自己を実現するために「学ぶ心」は不可欠です。「学ぶ心」とは、自分の心の中の内面が、どこを向いて、どう映っているのか、そ

れを見つめ続ける姿勢です。慢心をせず、人にへつらうことなく、謙虚であれ、ということです。

三つ目は、コラボレーション、「協力する心」です。相手に対する敬意を忘れず、人の気持ちを汲み取り、協力して歩んでいく、そうした心です。

二十一世紀に入って世界は多極化とグローバル化が進み、自分ですべてを決められる国はありません。経済問題やテロ、流行病や気候変動など、各国が多くの同じ難題に直面し、一国だけで対処できるものも殆どありません。

国内においても同じことがあります。例えば、社会保障や雇用問題を巡って、若い世代と中高年の世代間の軋轢が高まるかも知れません。TPP、環太平洋戦略的経済連携協定のように地域間、業種間の新たな軋轢もあります。

協力や妥協、チームワークによる合意形成が不可欠な時代になっているのです。利害の相反する相手と新しい関係を築いていくためには、人の気持ちを汲み取る「協力する心」を持つことを置いて、他にないと考えます。

三つのことを申しました。「職業人の倫理」「学ぶ姿勢」「協力する心」のそれぞれは、実は、本学が建学の精神とともに、人間の成長に必須なものとして求めている四大綱、即ち「ルールを守る」「ベストを尽くす」「チームワークをつくる」「相手に敬意をもつ」ことを具現化したものでもあります。卒業のこの日を一つのきっかけにして、改めてそれらを思い出し、これからの人生に持ち続けていただきたいと思えます。

明日から皆さんの母校となる中京大学は、開学六十年を迎えます。永い伝統と実績は、十一万人を超える先輩の汗と涙の結晶と言っても過言ではありません。その心と姿勢も、ぜひ大切にしてください。

最後に、皆さんが、自分の未来を切り開いていってくれることを信じ、時代の先導者となることを祈って、私のはなむけの言葉といたします。

本日はご卒業、おめでとうございます。